



高齢者にリスク高い薬、80代処方ピーク 睡眠・抗不安

有料会員限定記事

編集委員・田村建二 松浦祐子、田村建二 2019年12月7日22時00分

シェア

ツイート

ブックマーク

メール

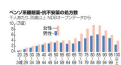
印刷

[list](#)

18



ベンゾジアゼピン系の睡眠薬・抗不安薬。さまざまな種類がある



のみ続けると転倒や骨折、認知機能の低下を招きやすいとして、高齢者はできるだけ使用を控えるべきだとされている睡眠薬や抗不安薬が65歳以上に多く処方され、ピークは80代だった。厚生労働省のデータをもとに朝日新聞が解析し、高齢者にリスクの高い薬が多用されている実態が浮かんた。

睡眠薬や抗不安薬は、中枢神経の興奮を抑えるなどの作用があり、眠気をもたらしたり不安感を少なくしたりする。ただ、高齢者がデパスやハルシオンなどの「ベンゾジアゼピン（ベンゾ）系」といったタイプを使うと、転倒や認知機能障害が起こりやすくなるという研究が数多くある。やめられなくなる依存も起こしやすく、死亡リスクが上がるという報告もある。

高齢になると、薬を分解して排泄（はいせつ）する能力が低くなることから、薬が効きすぎたり、副作用が強くなりやすい。日本老年医学会の高齢者の薬についての指針「高齢者の安全な薬物療法ガイドライン」は、これらの薬について「使用するべきでない」「可能な限り使用を控える」と求めている。第三者機関の医療事故調査・支援センターは6月、ベンゾ系の薬をのんでいた高齢者が入院中に転倒し、頭を強打して死亡した複数の事例を示し、慎重に扱うよう提言している。

[PR]

厚労省は3年前から、医師が診療報酬を請求するのに使う明細書（レセプト）の情報をもとに、処方量の多い薬を性別・年齢層別にまとめ、NDBオープンデータとして公表している。データ作りに携わった吉村健佑・千葉大 特任教授（医療政策学）の協力を得て、2017年度に外来処方されたベンゾ系の睡眠薬・抗不安薬について集計。人口千人あたりの処方数を、総務省の統計をもとに年齢層別に出した。

ベンゾ系の睡眠薬・抗不安薬のうち、性別と年齢層が判別できる約39億8千万錠を解析。53%の約21億錠が65歳以上に、33%の約13億1千万錠が75歳以上に処方されていた。

男女別では女性が多く、千人あたりの処方量は、女性では80～84歳が約9万7千錠でピークに。この年代は年に平均100錠近くのものである計算になる。続いて85～89歳、75～79歳と続いた。男性は85～89歳が約6万2千錠と最多だった。

なぜ高齢者に多く使われている…

 こちらは有料会員限定記事です。有料会員になると続きをお読みいただけます。

残り：1800文字／全文：2715文字

今すぐ登録（1カ月間無料）

ログインして全文を読む

980円で月300本まで有料記事を読めるお得なシンプルコースのお申し込みは[こちら](#)

関連ニュース

豊胸手術を悔いた室井佑月 乳がんで気づいた生への執着
 葉っぱビジネスの町 高齢者活躍でも医療費は減らない？
 カツオのアニサキス食中毒 「異変」は海で起きていた
 39歳で認知症、人生終わり？ とともに生きる道選んだ
 20代で始めた不妊治療 仕事との両立に葛藤…その末に

こんな特集も

日本最高位は17位「傳」、世界のベストレストラン50（アエラストイルマガジン）

PR情報

今、あなたにオススメ（PR）